

## 7. 聖霊の働き

ペテロの手紙#7

<https://ichthys.com/Pet7.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

**余談：** 苦難の教理の紹介の最後に、神が今日のクリスチャンが耐え忍び、その忍耐を助けてくださる主な方法の一つは、聖霊を通して与えてくださる超自然的な支えによるものであることを述べました。聖霊はイエス・キリストを信じるすべての人の内に住んでおられ([ヨハネ 14 章 16-17 節](#))、聖霊の働きによって、私たちクリスチャンは、霊的成長であれ、個人的な働きであれ、苦しみに耐えることであれ、神が私たちに望んでおられることをすべて行う力を受けるのです。現代のクリスチャンの間では、御霊の働きについて混乱が多いので、私たちのために御霊が働いてくださる正確な性質について考えることは、この時点で役に立つかもしれません。パウロは異端の多いコリントの信徒への手紙第二の 3 章で、この問題を検証しています。

### 神の栄光を反映する：

わたしたちは、またもや、自己推薦をし始めているのだろうか。それとも、ある人々のように、あなたがたにあてた、あるいは、あなたがたからの推薦状が必要なのだろうか。わたしたちの推薦状は、あなたがたなのである。それは、わたしたちの心にしるさされていて、すべての人に知られ、かつ読まれている。そして、**あなたがた**は自分自身が、わたしたちから送られたキリストの手紙であって、墨によらず生ける神の霊によって書かれ、石の板にではなく人の心の板に書かれたものであることを、はっきりとあらわしている。( [第二コリント 3 章 1-3 節](#) )

パウロはまず、ローマ帝国で一般的であった世俗的な慣習、すなわち「推薦状」を用いるコリント教会のやり方を批判しています。古代ローマで官職を得たいと思えば(帝国の官僚機構は、現代の私たちの国に比べてもはるかに多くの「良い職」を包含していました)、立派な「推薦状」は不可欠でした。どうやらコリント人たちは、他のキリスト教共同体や指導者たちから(本物か偽物かは別として)そのような推薦状を携えてやってくる旅回りの詐欺師たちにだまされていたようです。事態は悪化し、コリント人たちは、真の使徒たちよりも、こうした比較的無名の「宴会場スピーカー」たちを重んじるようになっていました。理由はただ、その「立派な推薦状」を持っていたからです。おそらく

彼らは話術にも長け、洗練された言い回しや、くすぐるような修辭的技でコリント人たちを楽しませていたのでしょう。ペテロやパウロの時代、こうしたことは決して珍しくはありませんでした。ルキアノスのような巡回演説家は、修辭学や哲学の講義で生計を立てており、当時最高の娯樂のひとつとみなされていたのです。しかし、パウロはコリント人の態度に憤慨し、正当に非難しました。なぜなら、彼らは神の承認ではなく、人間の承認(推薦状に表されたようなもの)をより重視していたからです。

私たちクリスチャンが救いを受けた後も地上で一時的な生を続けている理由は、神に栄光を帰すためです。では、この高い使命を果たすにはどうすればよいのでしょうか。コリント人たちは、「重要人物」が「あなたは神に栄光を帰している」と認めてくれるなら、それで本当にそうしているのだと考えていました。彼らの誤った見解によれば、神に栄光を帰するためには、利用できるあらゆる「人間的手段」を躊躇なく用いるべきだ、というのです。つまり、人々の承認を求め、自分自身を売り込み、世の人々が認める活動に積極的に関わるべきだ、と。しかし、パウロは彼らに率直に「それは間違っている」と告げます。彼自身に関して言えば、「人間的な」成功の証(推薦状など)は必要ない、と言うのです。パウロには、神が与えられた証明があり、それはコリント人自身の存在でした。彼らこそがパウロの「推薦状」であり、彼の奉仕の実を証明していたのです。パウロの「手紙」は、ペンやインクといった物質的なもので書かれたり、朽ちる紙の上に書かれたりしたものではなく、聖霊によって読者たちの心に記されていたのです。パウロの言わんとしていることがわかりますか？ 良いクリスチャン生活を送るための真の力は、人間の努力からではなく、神(聖霊を通して)から来るのです。そして、クリスチャンの成功の真の証しは、人間の称賛ではなく、靈的な実りにあるのです。

パウロがその気になれば、コリント人たちに自分のための立派な推薦状を書かせることもできたでしょう。自分の働きを誇り、大げさに宣伝し、注目を集め、広報担当者を雇うことさえできたはずですが。しかしパウロは、神のやり方はそのようなものではないと知っていました。神のやり方とは、コリント人自身の**生活**を通して「宣伝」することだったのです。彼らの生活こそが唯一正当な推薦状であり、使徒の働きの実を示す証拠だったのです。人々は、この主イエス・キリストの弟子たちを見、その靈的成長や奉仕を見て、「本当にこれは神の御業に違いない」と結論づけるべきでした。では、私たちはどのようにして神に栄光を帰すのでしょうか？——それは、神ご自身が私たちを**通して**ご自分を栄光で輝かされることを許すことです。私たちが主に従い続け、靈的に成長し続け、主が与えられる試練に耐え続け、個々の奉仕の務めを果たし続けるなら、そのときにこそ神の力と愛と栄光が私たちの人生に反映されるのです。ここでのパウロの言葉は、「自分はクリスチャンだ」と大声で主張することによって神に栄光を帰すべきだ、という意味ではありません。パウロはコリント人たちに「天国行きの牛車」といったスローガ

ン入りのステッカーを刷って貼れ、と言っているわけではないのです。単に「私はクリスチャンです」と言うだけで神の栄光が映し出されるわけではありません。そうではなく、私たちがクリスチャンらしく生きることによって、他の人々が「これは確かに神の力に違いない」と言うようになる——これこそが、神の栄光を映す道なのです。

## 聖霊の助け：

こうした確信を、わたしたちはキリストにより神に対していただいている。もちろん、自分自身で事を定める力が自分にある、と言うのではない。わたしたちのこうした力は、神からきている。神はわたしたちに力を与えて、新しい契約に仕える者とされたのである。それは、文字に仕える者ではなく、霊に仕える者である。文字は人を殺し、霊は人を生かす。(第二コリント3章4-6節)

4 節から 6 節でパウロは、彼が抱いている確信は自分自身の力から出ているのではなく、神から来ているのだと述べています。パウロは自分が自給自足の人間ではなく、すべてにおいて神が十分であり、自分の奉仕に力を与えてくださるのだと語っています。これは私たちのクリスチャン生活のすべてにも当てはまります。神がパウロに奉仕の力を与えられたように、神は私たちにも、求められることを果たす力を与えてくださるのです。その力の直接の源は聖霊です。聖霊が私たちのうちに住んでくださることは、旧約時代の信仰者には与えられていなかった、クリスチャンだけが持つ特別な恵みです。パウロは 6 節で、「私たちは文字によるのではなく、霊による新しい契約の奉仕者だ」と語っています。ここでいう「文字(律法)」は人を死に至らせませんが、「霊」は命を与えます。パウロが言いたいのは、モーセの律法のもとでは(旧約聖書の最初の 5 つの書＝モーセ五書に示されたように)、まだキリストの十字架による救いが実現しておらず、人は自分の罪深さと救い主を必要としていることを強調されていたということです。しかし新しい契約(イエス・キリストの人格とその御業)においては、神の言葉は聖霊によって実現された私たちの救いを強調し、聖霊によって力を与えられた新しい人生を歩むよう導かれるのです(ヨハネ 7 章 39 節)。聖霊が私たちのうちに住んでくださるという事実は、クリスチャンにとって大きな特権です。パウロはここで、もし聖霊がいなければ自分は奉仕を行う「資格」も「力」もなかっただろうが、聖霊によって「有能にされた」のだと告白しているのです。

## 聖霊の働きのすぐれた栄光

もし石に彫りつけた文字による死の[律法の]務が栄光のうちに行われ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去るべき栄光のゆえに、その顔を見つ

めることができなかつたとすれば、まして霊の務は、はるかに栄光あるものではなからうか。もし罪を宣告する[律法の]務が栄光あるものだとすれば、義を宣告する務は、はるかに栄光に満ちたものである。そして、すでに栄光を受けたものも、この場合、はるかにまさった栄光のまえに、その栄光を失ったのである。もし消え去るべきものが栄光をもって現れたのなら、まして永存すべきもの(たとえば、信者への御霊の奉仕)は、もっと栄光のあるべきものである。(第二コリント 3章7-11節)

旧約の契約において現れた栄光と比べると、すべての信者に与えられている聖霊の新しい奉仕における栄光は、はるかにまさっており、旧いものは「取るに足らない」とさえ言われています(10 節)。これはどういう意味でしょうか。「栄光」という言葉は、ギリシア語で「ドクサ(δóξα)」といい、「輝き、光輝」という意味のほか「名声、評判」という意味もあります。神をあがめるということは、神ご自身のすばらしい御姿や御業の光り輝く栄光を、私たちの目に見えるかたちで示すことです。パウロがここで引用している旧約聖書の例では、神はモーセの顔を輝かせることによって、その輝きのほんの一端を人々に示されました。モーセは律法を受け取るために主とともに四十日間過ごし、その結果、いわば神の栄光が少し「こすりついた」状態になったのです。この栄光はやがて消えていくものであり、モーセはイスラエルの民がその終わりを見ないように顔を覆いました。しかし、聖霊による神の栄光は消えることはありません。それはすべてのクリスチャンの内に燃え続ける輝く光であり、その光が外に現れて神の栄光を示します。パウロによれば、この新しい栄光は旧約における奇跡よりもはるかにすぐれたものです。聖霊を通して私たちの内からあふれ出す「信仰」「希望」「愛」は、どんな目に見える奇跡よりも明るく輝く星なのです。

### 神の鏡：

(12)このような、[聖霊の働きによる支えに基づく]望みを抱いているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。(13)モーセのようなことはしません。彼は、消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛けました。(14)しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が朗読されるときには、同じ[ような]覆い[真の栄光を隠すもの]が掛けられたままで、[真理を覆い隠すこの「ベール」が]取りのけられていません。それはキリストによって取り除かれるものだからです。(15)確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆い[のようなもの]が掛かっています。(16)しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。(17)主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由(すなわち、神の

みこころを行う機会と力)があります。(18)私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます(すなわち、もっとキリストのようになっていきます)。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(新改訳IV [第二コリント3章12-18節](#))

上の箇所でパウロは、聖霊の働きによって「確信」(ギリシア語 エルピス(ἐλπίς)、つまり「積極的な希望」)を持ち、その結果、自分の奉仕において前進する勇気を与えられているのです(12 節)。旧い契約のもとでは、モーセは自分の顔に覆いをかけなければなりません(13 節)。しかし、今日の私たちにはまったく異なる命令が与えられています(18 節、これは 13 節の結論にあたります)。それは「主の栄光を映し出すこと」です。多くの翻訳ではギリシア語の分詞 カトプトリゾメノイ(κατοπτρίζομενοι)を「見つめる」と訳していますが、ここでは中動態の意味から「映し出す」と訳すほうが正確です。モーセの顔から輝いていたのは文字通りの光でした(先ほど述べた ドクサ(δόξα)の第一の意味「輝き」)。一方、私たちが映し出すよう命じられているのは、神ご自身の存在そのものです(ドクサの第二の意味、「神ご自身の名声と評判」)。では、どうすれば神の偉大な存在、その言い尽くせない愛、完全な真理を映し出すことができるのでしょうか。パウロは、「私たちがみな、主の霊によって、同じかたちに変えられ、栄光から栄光へと進むことによって」それを成し遂げるのだと教えています。ここでいう「同じかたち」とは、主イエス・キリストのかたちです。私たちは本来キリストに似た存在ではありませんが、「クリスチャン」(文字通り「小さなキリストたち」という名が示すように、日々少しずつ主に似る者となるよう努力すべきです。もし私たちがこの努力をするなら、その結果は「ますます大きな栄光の反映」となります。「栄光から栄光へと」という成句 アポ・ドクシス・エイヌ・ドクサン(ἀπὸ δόξης εἰς δόξαν)の意味)。そして、私たちが恵みにおいて成長していく姿を見た人々は、その奇跡的な変化の源が「主の霊から来ている」と認めざるを得ないのです。本当に神の栄光を映し出すためには、神の方法によらなければなりません。私たちを変える真の力の源は聖霊であって、私たち自身の人間的な力ではありません。私たちが自分を前に出そうとすればするほど、人々は私たちの顔を「鏡」に見るだけで、主イエス・キリストのはっきりした姿を見られなくなってしまうのです。

## 結論：

(1) では、どのようにすれば「神の方法」で物事を行うことができるのでしょうか。まず第一に、「人間の方法」では行わないことです。作り物めいた「楽観的なおしゃべり」など、人はすぐに見抜きます。キリスト教的な響きを持つ言葉を機械的に文ごとに付け足したり、内面的な力学が伴わないのに「クリスチャンらしさ」を外側だけで見せかける

ことは、良くては時間の無駄にしかありません。大まかに言えば、クリスチャンの生き方はとても単純です。キリストを信じれば、救われます。しかしその次に続くのは、聖さを追い求める生涯の歩みです。霊的成長には、神の真理を継続的に学び、それを信じ、適用していくことが必要です。そして霊的に成長するにつれて、神は私たちに試練に立ち向かう機会を与え、またそれぞれに与えられた賜物に応じて他の人々に仕える機会を与えてくださいます。もし私たちがこの道を歩んでいるなら、神の恵みと愛をますます大きなかたちで反映することができるようになり、その結果として、コリント人への第二の手紙 3 章に書かれている命令を果たすことになるのです。

(2) **聖霊の働きはどのように行われるのでしょうか。**まず忘れてはならないのは、ゼカリヤ 4 章 6 節で主がゼルバベルに語られたことばです。「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって——と万軍の主は言われる」。私たちは単なる道具にすぎません。神は私たちにきわめて正確な「行進命令」を与えてくださっています。私たちは、良きしもべとしてそれをただ実行すればよいのです。成長や結果、力は聖霊が与えてくださいます。エリヤが恐れてホレブ山に逃げたとき、主は彼に同じ教訓を教えようとされました。まず、彼が隠れていた洞穴の前を非常に強い風が通り過ぎ、そのあと地震、さらに火が起きました。しかし、これらの目に見える大きな力の中には主はいませんでした。最後に「かすかなささやき」があり、その声の中にこそ神の力と臨在が**あった**のです。聖霊は私たちの心にささやきかけ、励まし、導き、慰めてくださいます。その働きは、どんな目に見える奇跡よりも力強いものです。もし私たちが神と共に歩み、罪を告白し、霊的に前進し続けるなら、**聖霊は必ず助けてくださいます**。聖霊の働きは目に見えないかもしれませんが、その結果ははっきりと現れます。要するに、私たちが信仰をもって前進するなら、聖霊の助けを確かに受けることができるのです。その働きを数値化できない、あるいは熱さや寒さのように直接「感じる」ことができないからといって、聖霊の働きが現実でなく、重要でないということにはなりません。これは大切な点です。今日、多くのクリスチャンが「何かを感じたい、体験したい」という欲求のために、疑わしい、さらには異端的な実践に走っているのです。必要なのはただ従ってみることです。そうすれば、聖霊は私たちを導いてくださるのです。

(3) これらすべてが「**苦しみに対する私たちの姿勢**」とどのように関係するのでしょうか。もし私たちが本当に主に信頼して手を伸ばすなら、主が助け主・慰め主としてくださった聖霊が、私たちが通らなければならぬどのような試練にも耐えられるように助けてくださいます。もし本当に神が私たちの羊飼いであり、私たちを見守り、深く気にかけてくださると信じているなら、なぜ私たちは不平を言い、信仰においてくじけてしまうのでしょうか。私たちが不平を言うのは、苦しみを感ずき、また人間だからです。ダビデの詩篇には、主への嘆きの叫びが満ちています。しかしダビデは信仰においてくじ

けることはありませんでした。彼は痛みのただ中にあっても神を信頼しました。涙を流しながらも、主が恵みとあわれみをもって救ってくださると確信し、主に向かって泣き叫んだのです。クリスチャンの利点は、まさにこのような信仰、つまり私たちを助けてくださる愛に満ちた父なる神への確信を持つことです。苦しみの時にこの一歩の信仰を踏み出すなら、聖霊は私たちを助け、慰めてくださるのです。